



発行人
〒104-0052
東京都中央区月島3-15-9
全義連事務局
TEL 03-3534-0666
編集者 荻原 栄

忠臣蔵検定試験復活

柿崎輝彦

令和六年十二月一日、忠臣蔵検定を実施した。

試験会場は、高輪泉岳寺をはじめ北は北海道から南は九州熊本まで、忠臣蔵にゆかりのある五つの会場で開催した。

忠臣蔵検定は、忠臣蔵博士の称号を授与することを目的に、平成十五年忠臣蔵博士試験として開始。以降難易度を少しゆるめた忠臣蔵通検定や忠臣蔵三級検定が加わったが、コロナ禍を機にいずれもが中断されていた。近年試験の再開を望む声が高まるなか、令和六年四月からの一般社団法人としての活動開始を記念してこのたび復活した。

今回の出題は全四十問、内訳は四択三十四問、虫喰い三問、記述式三問の百点満点とし、基礎・中級・上級の難易度に応じてそれぞれ配点を二点・三点・四点とした。六十点以上を合格とし、七十五点以上を忠臣蔵講師、九十点以上には忠臣蔵博士の称号を授与し、合格者には様々な特典を付与した。

設問については、史実としての元禄赤穂事件を知る上で重要な事柄を深掘りし、それぞれの場面や事象について出題した。また受験対策として泉岳寺講堂において二度セミナーを開催。遠隔地の方に対応すべくZOOM対応をしたこともあり全国の受験者が参加された。

忠臣蔵検定の復活は、読売新聞・神戸新聞・京都新聞・赤穂民報に取り上げられ、話題性は一定程度提供できたものの、以前の検定試験ブームは影を潜めたのか受験者は全体で三十名と盛り上がりなりに欠けた。

別表

受験者数 30 人
合格者数 16 人
合格率 53 %
平均点 62.7 点

区分		内訳	該当者	出現率
博士	90点以上		3	10%
講師	75点以上		8	27%
合格	60点以上		5	17%
不合格	60点未満		14	47%
合計			30	100%

区分	該当者	博士	講師	合格	不合格	合格率	平均点
会員	21	2	6	4	9	70%	63.7
非会員	9	1	2	1	5	30%	60.6
合計	30	3	8	5	14	53%	62.7

年代	該当者	博士	講師	合格	不合格	合格率	平均点
10代	1	0	0	0	1	0%	最年少15歳
20代	2	1	0	0	1	50%	
30代	3	0	0	0	3	0%	最年長82歳
40代	4	0	2	0	2	50%	
50代	10	0	2	3	5	50%	平均年齢53歳
60代	8	1	4	1	2	75%	
70代	1	0	0	1	0	100%	
80代	1	1	0	0	0	100%	
合計	30	3	8	5	14	53%	

性別	該当者	博士	講師	合格	不合格	合格率	平均点
男性	25	2	6	4	13	48%	60.4
女性	5	1	2	1	1	80%	74.2
合計	30	3	8	5	14	53%	62.7

しかしながら久し振りの検定復活だったこともあり、熱心な受験者が多く、過半数の十六名の方が合格。中でも忠臣蔵博士三名、忠臣蔵講師八名が新たに誕生したことは喜ばしい限りである。後日、合格者並びに称号受賞者には各証書をお渡しさせて頂いた。

試験結果については左の別表をご参考ください。

令和六年度忠臣蔵検定の問題と解答は、中央義士会ホームページに掲載しているのをご確認頂きたい。

令和7年度 忠臣蔵検定

- 1 実施日 令和7年11月30日（日）
受付開始 13時 （全会場同時）
試験開始 14時 （全会場同時）
- 2 実施会場
- | | | |
|--------|------|----------------------|
| 本部 | 泉岳寺 | 東京都港区高輪2-11-1 |
| 北海道支部 | 北泉岳寺 | 北海道砂川市空知太444-1 |
| 新潟支部 | 長徳寺 | 新潟県新発田市大栄町2 - 7 - 22 |
| 京都支部 | 林昌院 | 京都市下京区猪熊通五条下る柿本町671 |
| 播州赤穂支部 | 花岳寺 | 兵庫県赤穂市加里屋1992番地 |
| 熊本山鹿支部 | 日輪寺 | 熊本県山鹿市杉1607 |
- 3 受験料
- ・ 3,300円（中央義士会会員）
 - ・ 5,500円（非会員）
- ※ 今回の受験を機に入会される場合は下記特別価格になります。
混乱を避けるため、振込先は受付確認後、個別にお知らせします。
- ・ 初年度年会費（5,500⇒3,300円）+受験料（3,300円）=6,600円
- 4 募集 募集締切 令和7年11月16日（日）
但し、各会場での受付が定員に達し次第受付終了とします。
- 5 受付方法 下記 SMS（ショートメール）またはメールでのみ受付
- ・ SMS 090-3464-0047（中央義士会事務局）
 - ・ メール chuogishikai@gmail.com
- ※ 試験実施日までに受験対策セミナー開催（参加費無料）
セミナー開催の日程は中央義士会ホームページ上にご案内します。
- 6 合格者特典 賞状授与
高得点者には称号（忠臣蔵講師、忠臣蔵博士）認定
直後の12月14日「赤穂義士追憶の集い」参加費1,000円引き
次回忠臣蔵検定受験料1,000円引き
その他
- 主催 一般社団法人中央義士会
後援 全国義士会連合会・NPO法人忠臣蔵倶楽部

赤穂義士会活動の取り組み

赤穂義士会 会長 牟禮正稔

全国義士会連合会の皆様には平素より格別のご厚情を賜り深く感謝申し上げます。

赤穂義士会では、赤穂義士及び忠臣蔵文化の普及啓発のためさまざまな活動に取り組んでおります。

このたびは令和6年度の活動の一環をご紹介申し上げます。

赤穂城二之丸庭園屋形舟遊覧

赤穂城二之丸庭園は平成14年に本丸庭園とともに「旧赤穂城庭園 本丸庭園・二之丸庭園」として国名勝指定を受け、以降、発掘調査の成果に基づき赤穂城築城当時の姿に復することを目的として整備が継続的に行われています。令和6年度には庭園の西側に面する西中門が完成し、二之丸庭園の整備はほぼ完了に近づいてまいりました。

これら史跡の活用と義士顕彰のため赤穂義士会では平成18年度以降、コロナ禍による一時中断を除き、毎年「赤穂城二之丸庭園 屋形舟遊覧」を実施しています。このイベントはボランティアの協力のもと浅野号・大石号の二隻の木造舟を運航し、市民や観光客に二之丸庭園池泉を回遊していただくというものです。昨年度は4月27・28日と義士祭の12月14日に運航し、いずれも盛況で合わせて370人余が乗舟し、景品付き射的アトラクションをご堪能いただきました。

第4回忠臣蔵浮世絵デジタル展覧会の開催

赤穂市では立命館大学アート・リサーチセンターの協力を得て、平成30年度より赤穂市及び赤穂義士会が所有する忠臣蔵浮世絵をインターネット上で公開しており、

現在、公開点数は約2600点に及んでいます。

これらデータベース収録作品を中心に令和元年度からweb上でデジタル展覧会を開催しています。令和元年度には「討入り図の諸相」、2年度には「義士の頭領・大星由良之助」、5年度には「上方の忠臣蔵浮世絵」と題した展覧会をそれぞれ開催しました。令和6年度は11月7日より「ユニークな『忠臣蔵』浮世絵あれこれ」と題して浮世絵師たちが豊かな発想力を駆使して工夫を凝らしたユニークな作品をさまざまな切り口で紹介する第4回デジタル展覧会を公開しています。同展は、赤穂市所蔵作品を中心に立命館大学アート・リサーチセンター所蔵作品を加え、68件・108点の作品に解説を付けたものです。実際の芝居の豪華な演出を反映させた作品や、洋風表現を取り入れた作品、読み解くのに相当の知識量を求められる見立絵や滑稽な戯画や擬人画など、誰もが知っている物語であればこそ可能な作品世界は「忠臣蔵文化」のバラエティーの豊かさを如実に物語っています。

なお、第1回〜第3回の展覧会はいずれも継続公開しておりますので、併せて忠臣蔵浮世絵の世界をお楽しみいただけましたら幸いです。

赤穂義士顕彰板修繕

赤穂義士会では、義士関連史跡の普及啓発を図るため、市内各所に顕彰板を設置しております。また随時巡回を行い、老朽化した顕彰板の修繕・更新を行うなどしております。令和6年度には木製支柱及び棧の劣化した上飯屋地区の原惣右衛門宅跡、菅谷半之丞宅跡の顕彰板と城内三之丸に設置している清水門跡の解説板の3基の修繕を行いました。今後も引き続き顕彰板の維持管理に努めてまいります。

交流事業

赤穂義士会では赤穂義士及び義士に関係する史実の研究及び事績の顕彰を図る目的で全国各地の義士研究顕彰団体・機関との連携及び研究交流を事業のひとつとしております。その一環として平成21年度より毎年交流大使の派遣を行っています。新型コロナウイルス感染症の影響による中止期間がありました。令和5年度に再開し、令和6年度は12月8日の大阪義士会による赤穂義士奉賛祭典（於吉祥寺）、12月14日の京都義士会による赤穂義士追悼法要（於本妙寺）に会長の名代として市民合わせて3名を「赤穂義士会交流大使」に任命し、派遣いたしました。今後もこの交流事業を継続してまいります。

赤穂義士会講演会

赤穂義士会では例年、赤穂義士や忠臣蔵に関する著作のある研究者や作家を招き、講演会を開催しています。令和6年度は2月8日に上杉文化研究室室長で、上杉神社稽照殿館長でもある角屋由美子氏をお招きし、「上杉家と吉良家」と題してご講演いただきました。角屋氏は35年間米沢市上杉博物館に学芸員として勤務され、その間、平成25年度には同館学芸員として特別展「忠臣蔵の真実―赤穂事件と米沢―」を企画・担当された経緯があります。従来赤穂からの視点で語られることが多かった元禄赤穂事件について、吉良家とその縁者である上杉家からの視点でご講演いただきました。また原惣右衛門と米沢藩との意外な繋がりについてもお話いただきました。

赤穂義士会では今後もさまざまな分野の講師を招き、多彩なテーマでの講演会を開催し、義士や忠臣蔵文化の普及啓発に努めてまいります。ご興味のあるテーマがございましたらぜひご聴講いただきたいと思います。

最後になりますが、平素より赤穂義士会にご協力いただいております皆様方にこの場をお借りし改めて厚くお礼を申し上げます。

第4回忠臣蔵浮世絵デジタル展覧会 あなたのパソコンやスマホが展覧会場に！

Unique na Chushingura Ukiyo-e Are-Kore

ユニークな忠臣蔵浮世絵あれこれ

【展覧会の概要】

- I 工夫をこらした忠臣蔵・役者絵
- II 豪華装束の粋
- III 劇中劇に描き込まれた忠臣蔵
- IV 新しい斬撃
- V 浮世楽屋へのチャレンジ
- VI 東立絵の斬撃の楽しみ
- VII 豪華な装束から
- VIII 動物や老人になぞらえて
- IX 忠臣蔵の小道具を寄せ集めたもの
- X 劇中劇に描き込まれた文字がわかりやすいか？
- XI 幕の内でも忠臣蔵はあはれのそばに
- XII 忠臣蔵の装束をよそ

忠臣蔵浮世絵デジタル展覧会へのアクセスのしかた

●パソコンで

- インターネットで赤穂市ホームページ (<https://www.city.ako.lg.jp>) を開く。
- トップページの右側にある「忠臣蔵浮世絵データベース」の「ツアー」をクリックして、赤穂市「忠臣蔵」浮世絵データベースの入口ページ（「赤穂市忠臣蔵」浮世絵データベースへようこそ！）を開く。

●スマホで

- データベース入口ページにある「忠臣蔵浮世絵デジタル展覧会入口」をクリックする。
- 又かやで

チラシ裏面のQRコードを読み取ってデータベース入口ページにアクセス。「展覧会入口」から入場。

第4回忠臣蔵浮世絵デジタル展覧会 赤穂市立歴史博物館・赤穂市教育委員会市史編さん室 赤穂市史会

Unique na Chushingura Ukiyo-e Are-Kore

ユニークな忠臣蔵浮世絵あれこれ

令和6年11月7日(木) オープン！

赤穂市ホームページ (<https://www.city.ako.lg.jp>) 内の赤穂市「忠臣蔵」浮世絵データベース入口からアクセス！

赤穂市教育委員会 市史編さん室

〒678-0233 兵庫県赤穂市加島南中町3-24 (市史会館西隣、旧市立図書館1階)
TEL FAX 0791-43-4948 Eメール akohistory@city.ako.lg.jp



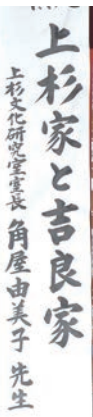
原惣右衛門宅跡顕彰板



屋形舟遊覧



角屋由美子氏による講演



交流大使の派遣 (吉祥寺)

若き浅野内匠頭長直(一)

蟹江 元

『中央義士会公報第57号』において、中央義士会の歴史認識の変更に追加として、浅野内匠頭は、精神の病ではないが、強情な面もあり、融通性に欠けるところもある。また刃傷事件の背景的原因がないとは言い切れないとした。これは平成十八年(二〇〇六)の細川家史料発表が浅野内匠頭について新発表をしたことで、浅野長直の性格認識を自分の主張を通すかたくなな性格が見られ、元禄事件の要因の一部である可能性と、『誠忠武鑑』に見える日比谷右近について吉良・浅野の確執も長年の因果関係が有り得るとしたことによる認識の変更だった。変更以前の歴史認識は『同会報第56号』にある。

ところが「後藤典子・細川家文書に含まれる浅野内匠頭関係史料の再検討」『熊本大学文学部附属永青文庫研究センター年報第7号』(以下、後藤論文)で、従来この内匠頭が長矩とみられていたのを若い頃の長直とした考察が発表され、長矩の性格とされたのが実は笠間時代の長直であったとされた。この後藤氏の指摘

は正しい。

考察された文書三通(細川越中守覚・細川越中守書状写・浅野内匠頭書状)は浅野長直に対する細川の諫言書と、それを聞かないことへの苛立ちと、浅野長直の回答であり、諫言は極めて手厳しく、長直の回答も剛直である。

諫言の書状を次に示す。

「細川越中守覚」

覚

- 一 萬事御きすいに候間、せめて三年は諸事御たしなニ被成、采女殿被成候に不相替、被成候ハ、可然事
- 一 年寄共と諸事御談合候て、異見をも御聞可然事
- 一 増尾平内之介、松井庄之介、不行儀者二候間、此方へ御預ケ可被成候事
- 一 木村伊折、是又此方へ御預ケ可被成事
- 一 傳丞、八大夫、市兵衛、是も預り申者候、御同心無之候ハ、御知行所へ被遣御置、御尤候事
- 一 連歌ひしと御止可被成事
- 一 座当とも、ふツと御よせ被成間敷事
- 一 朝ね又ハむさとしたるもの共と、夜放つ御無用事
- 一 萬御不養生、被成間敷事
- 一 人振舞、可被成事
- 一 金銀むさと御遣被成間敷事

- 一 御せいもん、むさと御たて被成間敷事
- 一 うつらすぎ被成候儀御止、御尤候事

右之条々、急度御止被成御尤存候

この諫言状は寛永十年(一六三三)のことと前掲の「後藤論文」は推定されていて、正確とみられる。長直の行状について直諫する内容で、十三ヶ条にわたる。「万事が世間知らずわがままで、せめて三年はがまんをして父の長重のようになりなさい。家老の意見も入れ異なる意見も聞く。長直の不行跡に関わる小姓を自分に預ける、あるいは笠間に置く。俳諧連歌も止める。座頭達も決して身近に呼び出さない。朝寝をしたり、素姓が分らぬ者を集めて夜遊びは無用。不養生はしない。人として振舞う。金銀をむやみに使わない。誓文をやたら書かない。形ばかりの数寄は止める」との内容だった。きすいは気粹、うつらすぎは現ら数寄だろう。『上杉と吉良から見た赤穂事件』はうつらすぎを鶉(うずら)飼いとしている。

寛永八年(一六三一)將軍徳川秀忠の容体に諸大名の注目が集まり、その子忠長の常軌を逸した行動や浅間山噴火など天災地異があり豊臣秀頼十七回忌の祟りの噂、大名間紛争・内紛、伊達政宗の派手な飲酒・踊り

が異様となるなど不穏な空気でも諸街道の嚴重な警戒を怠らなかつた。寛永九年秀忠が亡くなり家光は目付による諸大名の監視、のちの大目付による年寄衆(のちの老中)監視の恐怖政治を始めた(山本博文『江戸城の宮廷政治 熊本藩細川忠興・忠利父子の往復書状』)。加藤忠広・徳川忠長改易とその処分が行われ、忠長の側近の大久保忠尚(半助・将監三千石)は笠間の浅野長直に預けられた(小池清『徳川忠長 兄家光の苦惱、將軍家の悲劇』)。長直にとつて父長重が亡くなり継いだばかりだった。

ところで、天和二年(一六八二)浅野長矩が朝鮮通信使馳走人るとき口頭で質問した相手は、大久保加賀守忠朝で、大久保忠尚の同族にあたる。貞享四年(一六八七)長矩が江戸屋敷放火事件で犯人の女中を殺害し老中に案件が回ったが、不問としたのも忠朝だった(『冷光君御傳記・傳記附録』『赤穂分家濟美録』)。江戸では大名屋敷内で起きた事件でも提訴されれば町奉行の管轄となり、さらに案件が評定所送りとなれば重大な案件となるわけだが、忠朝は問題児を預かった浅野家への恩義を覚えていたと筆者はみている。忠尚は慶

長十九年（一六一四）重大事件である大久保忠隣（ただちか）の改易に連座し（その前哨戦が大久保長安事件だった）閉門となり、さらに忠長に連座するという不運の辛酸を経験した同族であり、忠朝が忠隣の系統を継いだ立場にあった。なお大久保忠尚の系統は浅野家臣や幕府御家人で存続した。当時の北町奉行は北

条安房守氏平でその父氏長は浅野家の近藤三郎左衛門正純とともに甲州流兵学小幡勘兵衛景憲の四哲で、氏長はさらに同系北条流軍学を大成する。実は氏長と浅野長直は慶安二年（一六四九）浅野邸で面談し、翌年山鹿素行を浅野邸に招き誓書を出している。当時は甲州流軍学氏長流の中にいて山鹿流を大きく打ち出していなかった。氏平の弟氏如（うじすけ）は氏長流軍学を受け継ぎ、その門下に松宮観山が居る。松宮は荻生徂徠と学問上対立し、赤穂事件でも太宰春台に対抗し赤穂義士を支持した（「松宮俊仍・読四十六士論」『赤穂義人纂書』）。氏平が評定所に回さず大久保忠朝に直で具申したのは、浅野家が身近にあったことに加え、放火事件が幕府によって禁書とされた山鹿素行『聖教要録』の出版前で、甲州流軍学における大きな異論がな

かったことが大きいだろう。なお、当時各藩は不都合が町奉行や評定所にあがるのを避け、町奉行所旗下の与力同心などに付け届け（賄賂・買収）を常態化していた。インフレ経済がそれを助長し浅野家の江戸家老や留守居役はそれに対応できていなかったことが背景にあるとみられる。

長矩の件は別に置き、幕府の不穏な情勢下で細川忠利が浅野長直に諫言したのであり、長直の後見人としての責任感と浅野家の改易や滅封などの処分を恐れて事前に対応した可能性が高い。細川家では諫言がオープンに扱われたことが明らかである（『稲葉継陽・日本史における諫言の機能と役割』『熊本大学永青文庫研究センター年報10号』）。この書状はそのまま出すことはなく、三カ条にまとめ浅野長直に宛てられたことが平野権兵衛に宛てた書状で分かる。細川忠利が浅野長直に宛てた諫言状に日付は無いが、忠利が平野権兵衛に宛てた史料は極月（十一月）二十七日で、「小姓はどこかに預けるか扶持放免すべきことを申し入れたが同意しない。広島浅野安芸守光辰、三吉（三次）の浅野因幡守長治とも申し合わせ、年寄衆（後の老中）稲葉丹後守正勝も承知し、条を少な

くして三ヶ条にした。この返事を長直に尋ねて欲しい。小姓を預けることはできない事情があるのなら丹後殿或いは浅野の二人に話すべきだ。話ができないことがあるのではないか。他人ではあるが、長直の為と思っているのに不愉快だ」とある。その書状を次に示す

「細川越中守書状写」

（略）

一 内匠殿召こめ御置候小性、何方へも御預ケ候か扶持を御はなし候へと、先度之ことく申候へ共、御同心なく候つる、たとい如何様之儀二ても、安藝殿、因幡殿、我等者、采女殿之御ミやうたいと成候て、一言可申入由、右方申合参候つる、其上丹後殿思召寄、我等二申候へと御申候つる故、随分かずすくなく三ヶ条二て申入候、理つまり候事を何かと御申候間、中々以来者、何事を申候共成かね、御同心弥有間敷候、

（略）

此返事之所を内匠殿へ御尋候て可被下候、

（略）

一 彼者何方へも御預ケ候事、不成子細候者、何とて不被仰間候哉、聞へたる事二て候者、其段丹後殿へも物語可仕候、我等など申候て、他

人二て候へとも、随分御ため可然様二と存事二候、されとも御きやくしん二候者、安藝殿、因幡殿へハ、彼者何方へも御預ケなき子細可被仰事二候、又御兩人へも御申なき事ハ、何か御座候ハんや、此段分別二及不申候故、何とも我等など者、あん二および不申候、にかゝ敷存候、以上

極月廿七日

細越中

平権兵衛様

稲葉正勝は山鹿素行を林羅山（道春・信勝）に引き合せた人物である。浅野長直は正勝のお供で細川邸を訪れるような仲だった（山鹿素行『配所残筆』）。正勝が加藤忠広の熊本城受け取りに下向した際に忠利の居城小倉に寄り、忠利が馳走したなど浅野・稲葉・細川の関係は懇意だった。元禄事件で大目付仙石伯耆守久尚が登城に際し、月番老中稲葉丹後守正往（正通まさみち）邸に寄り相談するが、この人は正勝の孫にあたる。細川家が年寄衆の稲葉に伝えるというのは内政干渉で、かつ幕府情勢からみて情報を与える行為は改易のリスクもあったが、そうはならない関係があった。細川忠利の内政干渉は他にも事例がある。丹波山（たばやま）谷家（一万六千石）の相続内紛につ

いて遺言通り行われなかったことへの干渉である。友人としての立場で西の丸年寄衆土井利勝を頼みとして動いたが、本丸年寄衆酒井忠世（ただよ）に阻まれ成功しなかった（寛永六年十月十九日付三斎（忠興）宛忠利書状）。なお、この書状は浅野光晟、長治と我ら（忠利、稲葉正勝、平野長勝、丹羽長重）が浅野長直の後見人であることを強調しており、実は忠利は長重から後見人を頼まれていたので内政干渉のつもりは無い。

長直が諫言書状を読んで忠利に同意しない旨を返すのは素早い動きだった。因みに平野権兵衛は賤ヶ岳（しずがたけ）七本槍の一人平野権兵衛長泰（ながやす）の子の権平長勝であり、長泰は五千石の旗本法名了然で泉岳寺に墓がある。妻は土方河内守雄久（かつひさ）女で、土方雄久の子雄氏（かつうじ）が伊勢菰野（この）の雄豊（かつとよ）の養女実は雄豊の嫡男豊高女が浅野大学室となっている。

浅野長重が忠利に長泰の病状を報告し、また、長泰が子息権平のことを忠興に頼む旨の細川忠利から忠興宛書状（寛永五年四月二十二日付三斎宛忠利書状）があり、長泰は同年

五月に逝去したので、その子で母を雄久女とする権平長勝が先の書状の宛先と分る。長泰の兄二人の子は長泰の推薦で細川家家臣となり、かつ弟も細川家家臣だった。

長直の反論は、平野権平宛の忠利の書は読んだが、小姓を何故他家に預けるのか、小姓が問題あれば、自分で成敗するべきで、このことで私が行跡と云うなら遠ざけ、家中の妨げにしない誓紙を書き提出する。他家に預けるのは従えないとした。その書状を次に示す。

「浅野内匠頭書状」

一 権平殿迄之御書付之通、拝見仕候、小性之儀、子細も不被仰聞預候へと斗二てハ、がてん不参候間、被仰聞可被下候

一 小性其身悪キ者と被思召候ハ、せいばい可仕候、又彼者故私不形儀なると思召候ハ、遠のけ、萬事之儀二かまい不申、家中之儀何事もさゝわり二成不申様二可仕と、せいしヲ仕可進之候

一 右之者預ケ申儀ハ、罷成申間敷候事

極月廿七日

浅野内匠頭（花押）

細越中様

まいる

なお、忠利が丹羽（にわ）長重に出した書状で、浅野長重の跡目として長直が上様に礼をとったのは良いことだが若いから日々研鑽せねばならないことを丹羽の使者に申し、さらに

稲葉正勝への使者についても尋ねていることが明らかである（寛永十年一月十日付丹羽長重宛忠利書状）。丹羽が稲葉に使者を出す旨を忠利に約して、実際に話したとみられる。稲葉に伝わり、これを受けたため浅野長直は使者佐々三左衛門を熊本の忠利に派遣した（寛永十年三斎宛忠利書状）。佐々は苦しい立場だったのだろうが、自分の辛労話を語る口軽の使者だったらしい。なお、丹羽長重は將軍秀忠の御伽衆でその女が、長直の正室である。

この忠利に名指しされた不行儀の者、増尾平内之介、松井庄之介、木村伊折、傳丞、八大夫、市兵衛について、浅野長直は、その後どうしたのだろうか。後の浅野長矩時代の『浅野家分限帳』には増尾の名は無いが、松井升右衛門百五十石岡林空助組、木村伊助十五石三人扶持多儀組とある。また堀伝之丞二十五石五人扶持多儀組、豊田八太夫二十石三人扶持多儀組、高見市兵衛看奉行米六石二人扶持と名と職務を辿れば後裔かも

しれない。傳丞以下は能役者であろう。浪費や朝寝、酒、節度などは俳諧連歌と能に絡むものとみられる。（十二月号に続く）

（参考文献）

- ・中央義士会会報第56・57号・中央義士会2006 2007
- ・誠忠武鑑・大昌閣1909
- ・熊本大学文学部附属永青文庫研究センター年報第7号 10号・熊本大学文学部附属永青文庫研究センター12016 2019
- ・青木昭博 小林輝久彦・上杉と吉良から見た赤穂事件・米沢信用金庫2017
- ・江戸城の宮廷政治 熊本藩細川忠興・忠利父子の往復書状・読売新聞社1993
- ・徳川忠長 兄家光の苦悩、將軍家の悲劇・吉川弘文館2021
- ・赤穂分家済美録（広島市立中央図書館）
- ・鍋田崑山輯録・赤穂義人纂書・国書刊行会1910
- ・山鹿素行 村岡典校訂・聖教要録 配所残筆・岩波文庫1940
- ・大日本近世史料細川家史料・東京大学史料編纂所1969
- ・浅野家分限帳（花岳寺元禄12〜13年）
- ・寛政重修諸家譜 浅野細川 大久保 北条 土方、平野

清流無間断(せいりゅうかんだんし)

旅流草一郎

昨年十二月十四日、泉岳寺の本堂にて恒例の「赤穂義士追憶の集い」が催され、法要は松根大地住持により厳かに執り行われた。私は自作の曲(堀部安兵衛)を奉納させて頂いたのだが、以下はそれに至り、私なりの思いを綴るものである。

今から二十年ほど前の唄修行の旅の道中、どこかの湯場で見知らぬ御仁と言葉を交わしていた時のこと。これまでギターを片手に旅を重ねてきたのは自身の一念発起に因るものだと自負していたが、各地で似た様な旅人と出会わずうちに、実は私も大河の一雫であり、目に見えぬ河の流れに同様に運ばれていたのかもしれないと、今はそんな想いに至っていると伝えたところ、それは禅語の教えにも通じますねと、その御仁が湯煙越しに置いていった言葉が「清流無間断」だった。



本堂での法要の様子

それから数年後、私は前述の曲を制作して唄い歩き、やがて全国発売へと漕ぎ着けた。そして、昨年の「赤穂義士追憶の集い」の奉納の儀に於いて、ついに同曲の献歌を許されたのだが、その本番直前、念願でもあった大舞台を前に緊張を禁じ得なかった私の胸に蘇った言葉があつた。「清流無間断」だった。今ここに私が置かれているのは大河の計らいに他なく、そして、その大河は今も眼前を流れていて、更には自分もその一雫だという想いに立ち返れば、もう何かに動じるといふことも無くなっていた。



神田伯山師の公演

さては幼少期、生家の近所の泉岳寺で遊び回っていた一雫が、やがて旅の川へと出立し、安兵衛の故郷新潟県新発田市へと流れ着き、安兵衛を思い慕う人々の心の清流に触れ、それが曲となり、今度はそれを泉岳寺に奉納したいと願うようになり、たまさか出立の地を目指すことになろうとは。人生とは本当に不思議なものである。全ては河の意思の元、初めから決まっている事なのだろうか。思えば、献歌奉納の大役を任せてくれた中央義士

会との出逢いも不可思議だった。何しろ出逢った場所が両国の酒場「忠臣蔵」だったのだ。今振り返っても、あの夜の盃は異なるものだった。一本のマイクの前に立ち、本堂に集った方々を見渡す。きつと皆様にも紆余曲折があり、此処に至られたことだろう。三百年の時を越え、日本中を否、世界中を訪ね巡った河の万感を込めて「堀部安兵衛」を奉納する。四十七人の男たちが心一つにしたことで起こった河の流れが元禄の世から現世へと今尚絶えずに泉岳寺を目指している。清流無間断。忠義の河がゆく。そして我々もその一雫なのだ。



本堂での献歌 (旅流草一郎)

その後、庫裡の二階に場所を変え、柿崎理事長の挨拶、講演に続き例年大好評の、神田伯山師による講演「大高源五」が行われた。最後に皆さんお待ちかねのお楽しみ抽選会が行われて満員の第一部、三部は盛会のうちに終了した。

(写真 原田可南)

浅野内匠頭追憶の集い開催報告

山北浩史

令和七年三月九日、萬松山泉岳寺（東京都港区高輪）において「浅野内匠頭三百二十五回忌 浅野内匠頭追憶の集い」が開催されました。

当日は晴天。午後一時、全国より約四十名の方が庫裡に参集し、お弁当を食べた後、午後二時、本堂にて法要が始まりました。導師は泉岳寺・松根大地住持（一般社団法人中央義士会（以下、「中央義士会」・常務理事）で、読経の中、参列者の焼香はのべつ幕無しでした。



本堂での法要

その後、「風さそう花よりもなおわれはまた春の名残をいかにとやせむ」（※多門筆記）という内匠頭の思いに心を寄せ、人としていかに生きるべきかといった「生（しょう）」（※四苦の一つ）についての御法話が説かれました。また、戒名「冷光院殿前少府朝散大夫吹毛玄利大居士」などが書かれた卒塔婆を持ち、代表者等の墓参が行われました。

午後三時から第二部が始まりました。中央義士会・柿崎輝彦理事長による挨拶、来賓者挨拶、赤穂義士並びに関係者ご子孫の紹介に続き、柿崎理事長による「中央義士会の近況と今後について」の記念講演がありました。

講演では、中央義士会は明治四十一年から始まったこと、大正時代に入ると男爵等の爵位を有する先人たちが積極的に活動されたこと、昭和八年に財団法人に認可されたこと、平成二十年の「公益法人制度改革」により任意団体として当会が承継されたこと、令和五年十二月十四日に非営利型一般社団法人として認可され、令和六年四月一日より活動を開始したこと、令和六年十二月には「忠臣蔵検定」が再開され、「忠臣蔵博士」、「忠臣蔵講師」が誕生したこと、泉岳寺内の墓域ガイドでは欧米諸国を始め多様な各国からの参拝者があること等々のリフレクシヨンがありました。そして、理事長は、「忠臣蔵」の海外からの逆輸入の懸念はないと思われるが、当会は三百三十三回忌に向け、忠臣蔵の最盛期を取り戻すべくより一層活発に活動するという方針を明確に致しました。

第三部懇親会では、「感謝くじ引き」が行われ、中央義士会・進藤務理事がくまなく選りすぐった景品、株式会社新正堂（東京都港区）・渡邊仁久会長（中央義士会・常務理事）から提供された「切腹最中」、遠藤信夫理事（静岡支部長）から提供された静岡茶など、関係者からの提供品も多くあり、参加者の全員はもれなく、これらを手にする事ができました。関係者各位におかれましては、一方ならぬご協力を賜り、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

歓喜に満ち溢れる中、午後四時三十分、中央義士会・松岡康彦専務理事による閉会の辞があり、集いは盛会のうちに終わりました。



庫裏 2 階での第 2 部の様子



浅野内匠頭墓前での法要

忠臣蔵愛好会 引揚げコースを歩く

沖田叙男

令和七年一月二十六日、朝晩の寒さはまだまだ厳しい中、幸いにも晴天に恵まれ、日中厚着で日向を歩いていると、汗ばむ陽気でした。

9時に両国駅西口に集合。



両国での出発前

今回も赤穂市からは、市議会議員の井田先生をはじめ、沢山の方々にご参加頂いた上に、参加者全員に、赤穂市のお土産を賜り、皆さん笑顔で移動。旧両国国技館の土俵跡のある、回向院脇に再集合後、柿崎理事長・井田先生がご挨拶。

説明員の儀員講師・添乗員の方を紹介後、二つの班に分かれて出発しました。

一班は、赤穂市のお客様を中心に、一般の方々に編成し、我が柿崎理事長が説明。二班は、中央義

士会のメンバーを中心に、説明は当会超ベテラン、百戦錬磨の儀員講師。私は一班に参加させて頂きました。

柿崎理事長の立板に水を流すが如くの説明に、皆様真剣に聞き入っておられました。鋭い質問にも一つ一つ丁寧に、篤実に応えてらっしゃいました。

一方二班の儀員講師。最初のうちは緊張が見られたとか？でもすぐに、いつもの優しい笑顔で解説し、いつものペースに。

出発して一時間ほど、旧新大橋の碑近くで、お約束の富岡相談役の差し入れがありました。その先、万年橋の袂には、奥様が待機され、清洲橋のケルンの眺めを楽しみながら、参加者としぼし談笑。

永代橋〜越前堀公園〜鉄砲洲までは、「誰何」をポイントに昨年からの新ルートを採用。

築地本願寺のレストラン紫水で昼食。築地本願寺〜汐先橋（汐留付近）も同じく新ルートを踏歩。

二班儀員講師は、金杉橋付近で、名字が同じの儀員十郎左衛門のエピソードを披露。また、討ち入り口上書の暗唱には、皆さんビックリされていたそうです。

泉岳寺直前の御田神社では、柿崎理事長が高田郡兵衛のエピソードを絡めて、熱心に説明する中、少し手前から歩きながら説明していた儀員二班が、一班を追い抜いて泉岳寺に先着するハプニングもありました。

十五時過ぎまでには皆様無事に完歩されました。泉岳寺へ到着してからは、墓域へ参拝後に各班毎に集合写真を撮って、完歩証が一人一人手渡されると十六時の閉門ギリギリの解散でした。

※その後希望者には、大石内蔵助他切腹地へご案内しました。

(写真 坂藤美子)



浅野家上屋敷跡で



隅田川河岸を歩く

令和七年度忠臣蔵講座始まる

荻原 栄

これまで、泉岳寺の講堂をお借りして、奇数月の第一日曜日に忠臣蔵講座を開催してきた。令和七年度は「地図を持ち外へ出よう」という主題を掲げ、刃傷事件から赤穂義士切腹までを時系列順に都内の関係史蹟を巡ることにした。ただし、八月は盛夏のため健康と体力面を考えて、この回だけは泉岳寺の講堂で冷房の効いている中での講義にした。

第一回目は二月二十三日に「刃傷事件の現場」として、東京駅日本橋口に集合。すぐ近くの吉良邸跡から竹橋の平川口までの関係史蹟を巡った。当日三十一名が参加。

吉良邸は本所の討入りが行われた場所が有名だが、元禄十四年の松之廊下での刃傷事件当時は、今の東京駅の北東、呉服橋近くに屋敷があった。この回の一番の目玉は、江戸城本丸の松之廊下跡（現皇居東御苑）で、刃傷事件の現場を確認することになったが、この日は天皇誕生日で皇居東御苑は立ち入り禁止であった。そのため、東京駅日本橋口を出て、吉良邸跡、柳沢出羽守上屋敷跡、細川家上屋敷跡、傳奏屋敷跡、老中土屋相模守上屋敷跡から内堀通りを歩いて平川口へと進むルートを取った。ガイドは大ベテランの遠藤さんと新進気鋭の東さんが務めた。

二回目は四月六日「内匠頭切腹の地及び義士自訴の地」と題して、新橋から虎ノ門の史蹟を巡った。この日は曇りで雨が降ったりやんだりという天候だったが、参加者は三十五名と、町歩きとしては盛会となった。この日のガイドは大ベテランの遠藤さんと上原さん。

新橋駅の飲み屋街には今も源助横町の名が残っているが、この辺は磯貝十郎左衛門などが仮寓していた源助町の跡である。

新橋駅前から虎ノ門方面へ進み、浅野内匠頭が切腹した田村家上屋敷跡、松平隠岐守上屋敷跡、荒木十左衛門邸跡、鏡照院、真福寺、青松寺などを巡り、終点は赤穂義士が自訴した大目付仙石伯耆守邸跡。仙石伯耆守邸跡一帯は、虎ノ門ヒルズや日本消防会館などのビル群になっていて過去の面影はまったくない。ただ、日本消防会館の南側壁に、中央義士会が制作に協力した立派な忠臣蔵レリーフがあり、新たな忠臣蔵名所になっている。

今年はおと六月一日、八月三日、十月五日に講座を開催するのは是非参加していただきたい。

(写真 坂藤美子)



第 7 回忠臣蔵講座 忠臣蔵レリーフの前で 全員



第 6 回忠臣蔵講座 平川口で 2 班



第 6 回忠臣蔵講座 平川口で 1 班

イタリア大使館訪問記

進藤 務

令和7年3月12日、イタリア大使館で切腹した赤穂義士を追憶する法要が営まれ柿崎理事長、萩原副理事長、能瀬京都支部長など本会から5名が参列いたしました。

現在イタリア大使館がある場所は、江戸時代元禄期に伊予松山松平（久松）家中屋敷でした。吉良邸討入後大石主税、堀部安兵衛など赤穂義士10名がお預けとなり元禄16年2月4日に切腹したところです。

赤穂義士お預かりのいきさつについては「久松家赤穂御預人始末記」に詳細に述べられています。またかつて総理大臣や大蔵大臣を歴任し、松方財政で有名な松方正義公爵邸であった建物でもあります。今回の法要は令和5年から始まり3度目の訪問です。当日は中央義士会、子孫の会、新潟県新発田市の武庸会のメンバー、イタリア大使館関係者など50名ほどが法要に参列しました。午前10時頃大使館前に三々五々集合、正門から入り受付で一人一人名前を言っってリストでチェックを受けます。

大使館本館に入るとリビングスペースにイタリ

ア製の立派なソファやテーブルなどが設置してあります。正面には大きな池と広大な大名庭園が広がり開放感を実感します。また、池を望む築山には赤穂義士がこの地で切腹したことを刻んだ石碑も建っています。

池に面したリビングスペースのガラス戸際に焼香盆とその両サイドに、中央義士会が献花したスタンド花が置かれて泉岳寺松根大地住持様による厳かで力強い読経が始まりました。読経が終わると参列者によるご焼香がしめやかに行われ法要は無事終了いたしました。引続き駐日イタリア大使ベネデッティ氏のお心遣いによりダイニングスペースにビュッフェが用意されていて、イタリア産ワインやカナッペ、カルツォーネなどと共にイタリアンな雰囲気を楽しむことができました。

この場をお借りして当日ご対応して下さいたベネデッティ大使はじめ大使館スタッフのみなさまに心から御礼申し上げます。今回の訪問で思ったことがいろいろあります。国籍の相違はあっても赤穂義士の忠誠心や赤穂義士をリスpekトする感性は万国共通です。そんなことを再認識した貴重な機会となりました。



法要の様 焼香はベネデッティ大使



法要後懇談の様子

豊岡支部発足

渡邊信和

豊岡は忠臣蔵の中心人物である大石内蔵助良雄の妻、理玖（りく）のふるさとです。理玖が生まれたのは寛文九年（一六六九）、前年には舞鶴（田辺）から京極氏が豊岡に移封されています。理玖はその京極氏筆頭家老の石東家の長女として誕生。理玖の母方の系譜には五世代前にあの有名な戦国武将の佐々成政がいる血筋です。石東家の理玖が赤穂浅野藩の家老の大石内蔵助に嫁いだのは理玖が十八歳の時、内蔵助が二十八歳の時でした。内蔵助・理玖夫妻は二男二女に恵まれ赤穂事件が起こる迄は平穏な何不自由のない幸せな生活を過ごしていたと思われまます。

元禄十四年（一七〇一）三月十四日に江戸城での刃傷事件以降の話は周知の通りです。豊岡はこうして理玖さんのご縁から忠臣蔵特に大石理玖を顕彰する団体が多く生れ、NHKの大河ドラマ「元禄繚乱」の時代には大勢の観光客が訪れ、イベントも多く開催されました。現在でも豊岡義士会・理玖子会など現存するものの、組織の高齢化や会員数の減少で以前の様な盛り上がりには欠け、市民の関心も薄れているのが現状です。二〇二一年秋に小生があるご縁で理玖さんの次男、大石吉之進（祖鍊元快禪師）の墓所を長年守って来られた地元元の百一歳の長老との出会いが会発足の原点でした。

まず手掛けたのが荒廃した吉之進の墓所の清掃・そして改修工事を実施、以後、毎年墓前法要（写真

は昨年九月の三百十五回忌法要）、大石吉之進まつりと題した交流会の開催等を行って来ました。

昨年十月には第二回のイベントで展示した忠臣蔵四十七義士の和紙人形を赤穂の大石神社に奉納させて頂きました。又昨年十二月には東京の高輪泉岳寺を訪問して墓前にお参りさせて頂きました。その節には中央義士会の柿崎理事長、松岡専務理事には大変お世話をいただきました。又同月、豊岡歴史博物館で堀部安兵衛の自筆書状の展示の際には新発田から来豊された武庸会の竹内様とも電話で情報交換をさせて頂きました。大石吉之進の会は現在地元豊岡や京阪神地区に約二十名の参加者が絆を深めており、二〇二二年の墓所改修工事には約二百名の皆様から浄財をいただきました。又行事開催には豊岡市の教育委員会・図書館・歴史博物館には毎回協力・後援をいただいております。

発足から三年を経過して、足下が固まりこれからがより充実させる時期かなと思っております。会の趣旨は「ふるさとの歴史と誇りを守ること」、そして「古里豊岡の充実と発展のために職業・身分・性別・年齢を超えた市民の強い絆をつくること」だと確信しております。今後も日々努力精進してゆく決意でございます。中央義士会の皆さまにはご指導・ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

（参考）大石吉之進 祖鍊元快禪師

元禄四年（一六九二）、大石内蔵助の次男として、播州・赤穂で生まれた。

幼名を吉千代といい、内蔵助が刃傷事件の残務処

理を終了する前の、同十四年五月、母の理玖の生家（但馬豊岡）に一足早く帰った。内蔵助ら赤穂義士の「吉良邸討ち入り」では、吉之進が連座しないように円通寺（豊岡市竹野町）で出家、祖鍊元快と称した。その後、京極家の菩提寺、興国寺に移り、赤穂義士らの菩提を弔ったが、宝永六年（一七〇九）三月一日、十九歳で病死した。内蔵助・主税・理玖らが世に知られる存在であったのに比べて、吉之進にはこれといった資料もなく、ほとんど無名な存在で悲劇の貴公子と言っても過言ではない。しかし、内蔵助は討ち入り前に吉之進に大石家の再興を託したとも言われている。現在は興国寺のあった大門山の一角に歴代の住職の墓の並ぶ中、それらの中央に眠っている。



墓前法要（315回忌）

高松桜フェスティバルで切腹地公開

柿崎輝彦

令和七年四月五日、大石内蔵助等切腹地を特別に公開した。今回の対応は高輪地区の地元行事である『高松桜フェスティバル』の一環としてである。

高松の名称は、旧細川邸（元禄赤穂事件当時は下屋敷）の一部が一時期高松宮邸だったことに由来しており、泉岳寺北側一帯の通称である。今日でも旧高松宮邸や高松中学校などにその名を残す閑静な住宅街である。イベントが大石内蔵助等切腹地のある都営高輪1丁目アパートを中心に開催されることから、今回も特別にご協力させていただいた。

イベントの目玉は、近郊にある東海大学付属高輪高等学校吹奏楽部による本格的なブラスバンドの演奏である。同校の吹奏楽部は全日本吹奏楽コンクールで何度も金賞を受賞するなど輝かしい実績があり、毎回極めて質の高い迫力ある演奏を披露してくれる。その特設ステージが大石内蔵助等切腹地横に設けられ、地元関係者はじめ多くの観衆が集った。

桜花満開のなか、泉岳寺においても春の義士祭が開催されており、期せずして高輪ゲートウェイ駅周辺の一部施設がお披露目され、物見遊山を兼ねた多くのの方が泉岳寺を参拝された。加えて当会員が毎土日祝に実施している義士墓域ガイドの案内も手伝

い、切腹地にも想定以上の方が足を延ばされた。

三時過ぎには、元宝塚歌劇雪組トップスター杜けあき様はじめ宝塚OG九名の方々が切腹地を訪問された。三月に東京・兵庫で上演された朗読劇「忠臣蔵」の出演メンバーで、無事公演を終えられたことの報告に、この日泉岳寺義士墓域を参拝され、その足で切腹地にもお立ち寄りいただいた。見習うべき奇特な方々である。

この宝塚版「忠臣蔵」とは、平成四年（一九九二）の杜けあきさまなら公演で初演されたもので、その完成度の高さから伝説化されている劇である。当時の資料を確認してみると三部構成で、それぞれが精緻に組み立てられており、小幕タイトルには撞木町、円山会議、川崎平間村など史実を彷彿させる地名が散見され、作品全体に奥深さを感じる。次回公演時には是非とも鑑賞したい。

これまでの中央義士会は、演芸演劇とは一線を引き、とりわけ史実の研究検証に特化すべく活動してきた歴史を有するが、これからは忠臣蔵を取り巻くより多くのジャンルの関係者とも交流を深めていく必要があると考えている。現在、泉岳寺講談会や同浪曲会とご縁に加え落語会や歌舞伎界とも関係構築中である。宝塚歌劇とも今回のご縁を大切にしたいと考えている。



切腹地前の広場でのブラスバンド演奏



切腹地の公開 ガイド中

細川家切腹地公開

長谷川美佳

令和七年三月二十日春分の日。港区高輪の旧細川邸にて、大石内蔵助以下十七名の切腹地が公開された。

この日は旧暦の二月四日にあたり、赤穂義士四十六名が、それぞれお預けとなった大名屋敷で切腹をした日。あれから三百二十二年。庭先跡から見上げる青空は、あの日と同じ色だろうか。と内蔵助の心情に思いを馳せながら、ガイドを始めた。

私は英語とスペイン語が話せるため、主に外国人の案内を担当している。来訪者の多くは、二〇一三年に公開されたキアヌ・リーブス主演のハリウッド映画『47RONIN』を観て、ここを訪れる。天狗や妖術使いが登場するファンタジー作品で、登場人物の名前以外はほぼ創作である。まず彼らには、その映画がフィクションである事を伝えてから、赤穂事件を初めから説明する。否定から入りがつかりさせる分、勇ましい討入りをまず話したいところだが、私は「討入りまでの経緯」を丁寧に伝えることを何よりも大切にしている。そこに赤穂浅野家家臣の葛藤、赤穂事件の魅力が詰まっているように思う。

次に説明するのが「切腹」だ。やはり「SAMURAI=切腹」というイメージが強い

ようで、皆、関心が高い。切腹は日本特有の行為と言っているほど、他の国にはほぼ例を見ない。無理に英語に訳すよりは、あえてそのまま「SEPPUKU」と説明している。介錯人のことは「Seppuku Helper(セップク・ヘルパー)」と呼ぶ。「自殺ではなく、処刑です。腹を刺しただけでは死ねないため、背後に立ったセップク・ヘルパーが、ほぼ同時に首を切り落とします、流れ作業で一人あたり五分程度でした」と。ここで、「武士の生き方」について説明する流れになる。

「侍にとって、どう生きるかよりどう死ぬかが重要でした。自分の命よりも主君への忠義を重んじ、武士の命である刀を自らの腹に突き立てることで、誇りをもって死ぬーそれが彼らの信念でした」

こう話すと、どの国の方も皆SAMURAIに感心する。中には「どうやったらSAMURAIになれるのか?」と尋ねてくるフランス人もいた。「現在は存在しません。当時はファミリールビジネスでした」と答えた。

ちなみに、訪問動機がキアヌ・リーブスではない例がある。それが、ハワイから来た日系人だ。ハワイには「KIKU TV」と言う日本チャンネルがあり、時代劇をよく放映している。忠臣蔵の認知度は、近年の日本の若年層よりも高いくらいだ。彼らは切腹地に足を踏み入れた途端、

涙ぐむことさえある。私はハワイ訛りが得意なので、より一層ガイドに熱が入る。午後に訪れたイタリア人からは、こんな質問を受けた。

「吉良の御首を手向け、そのまま泉岳寺で切腹するのが真の忠義ではないか?」しつかり調べて来られたのである。私はこう答えた。「そこに四十七士のこだわりがあったのです。「自分たちは『押入り強盗の類』(テロリストと訳した)と思われたくない。討入りは御上への不服ではなく『主君が果たせなかつた意志を継ぎ、無念を晴らした』だけである」だからこそ、口上書にそれを明記し、幕府に自訴をして正々堂々とお沙汰を待ちました。大石内蔵助は、浅野家・大石家の家名を汚さぬようにと考えて、形式や手順を大事にする人物だったと私は感じています」そして、彼の切腹直前の言葉「内蔵助は、天氣の良き日に、晴れ晴れとした気持ちで逝ったとお伝え下さい」重荷から解放され潔く切腹した姿を伝えた。

この日の来訪者は二百四十二名。そのうち、三割ほどが外国人だった。最後の説明を終えた午後四時。まもなく内蔵助らが切腹した時刻の日の差し方かと、私は思わず夕日を見上げた。

「今日も上手く、赤穂事件そして義士的主君への真心を伝えられたであろうか」私は世界中の人々に赤穂義士のことを

知ってほしいと、心から願っている。それを伝える事が使命と感じ、これからも義士墓域、切腹地ガイドを務めていきたい。

編集後記

再興忠臣蔵検定試験は三人の博士を出した。これまでの自宅で資料を使って解く試験から、試験会場で資料の持ち込みも不可の試験に代わったが、九十点以上の合格者が三人も出たのである。当会のホームページに試験問題と解答が掲載されているので見てもうれば分かるが、九十点をとるにはかなり難しい問題も正解しなければならぬ。皆さん頑張ってください。結果である。

今年の忠臣蔵講座は、都内の史蹟を巡っている。そのガイドは検定試験で講師以上の合格者が務めている。また忠臣蔵愛好会や泉岳寺での高輪台小学校の生徒さんの勉強会、切腹地公開の説明にも、講師以上の合格者があつている。今後もこのようなイベントで、実力を付けた方々の活躍を見ていきたい。

編集 萩原 栄

校正 柿崎輝彦、進藤 務、

蟹江 元

印刷 (株)正大印刷社